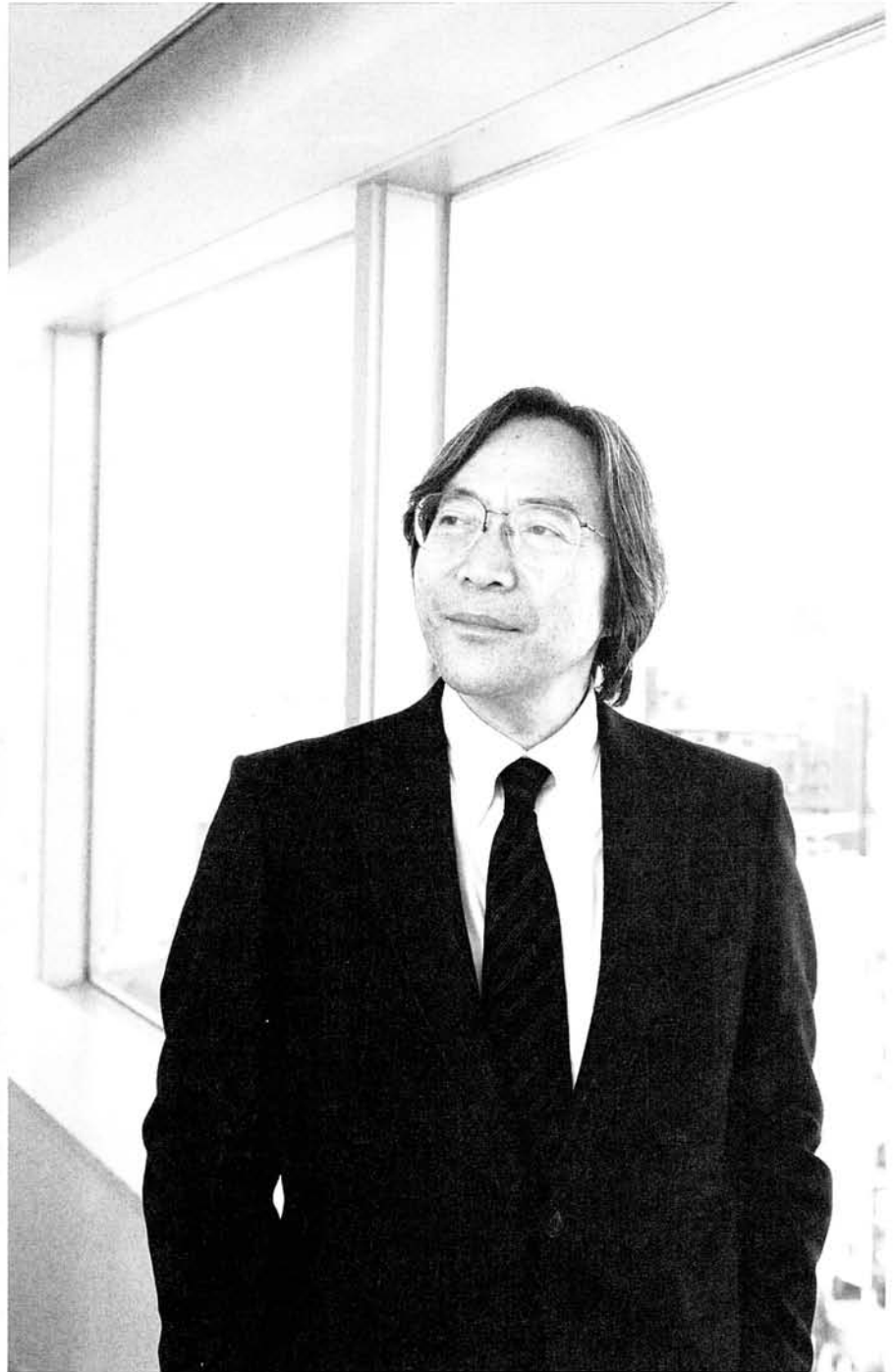


日本文化の底流にある主客二体の思想



「これからの世界経済の行方を弁証法によって描き出した『目に見えない資本主義』、『未来を予見する「5つの法則」』などを著している田坂広志さんは、
「目に見えない価値」を重視する社会の到来のなかで、
日本がもつ「成熟した文化の力」を見直すべきだと語る。
日本文化の底流にある主客一体の思想についてお訊きした。

田坂広志さん 多摩大学大学院教授

——近著『目に見えない資本主義』では、世界が転換期を迎えているなかで、日本の果たす役割について述べられています。また、世界の変化や発展を予見する哲学として「弁証法」が使われていました。互いに矛盾したものと対峙し、それらを止揚し統合して、より高い段階へと登っていく弁証法的思考は、AかBかという二項対立的思考とは対極にあるということでしょうか。

田坂 そうですね。ふだん私たちは「矛盾」を悪い意味に捉えています。たとえば「君の話は矛盾している」というように使いますが、それは「論理的に整理されたものは善なるもので、矛盾しているのは悪しきものだ」と無意識に思っているからです。ですから、「正しいものと間違っているもの」「良いものと悪いもの」「美しいものと醜いもの」というように世界を二項対立的に整理し、その一方に価値を置くことで、物事を割り切ろうとするのですね。

ところがあえていえば、この世界の本質は「矛盾」にあるのです。分かりやすい例を挙げると、今という瞬間が輝くのは、私たちの人生に「死」があるからです。我々の「生」は、「死」という終わりがあるからこそ、光り輝くのです。

● ● ● ● ● ● 集 日本文化の力 ● ● ●

人間の心の苦しみの原因を根本的に突き詰めていくと、それは我々が心のなかに、二項対立的な「境界」を生み出してしまっているからなのです。

ね。あるいは「愛情」というものも深い矛盾の中にあります。相手に対する愛があれば、相手を強く求める気持ちがあります。その愛が深いものであればあるほど、相手を自由にしてあげたいとも思う。人はその矛盾で苦しむときがあります。

人間の成熟とは何かといえ、実は矛盾に処する力を身につけることなのです。文芸評論家の亀井勝一郎は「割り切り」とは、魂の弱さである」と言いましたが、矛盾に処するには、人間として成熟した力量が必要になる。「小さなエゴ」は、世界の矛盾をそのまま受けとめられないので、器の小さな自分が受けとめられるような、二分法的な世界をつくりあげてしまうのです。

——矛盾と対峙するのではなく、二項対立的世界に流されてしまう……。
田坂 そうです。そして、そのことは、「人間の心になぜ苦しみが生まれるのか」というテーマとも関連してくるので

す。人間の心の苦しみの原因を根本的に突き詰めていくと、それは我々が心のなかに、二項対立的な「境界」を生み出してしまっているからなのです。

哲学や心理学には「タブラ・ラサ」（白い板）という言葉がありますが、我々がこの世に誕生したときには心が真っ白な世界だった。ところが、現実界での人生が始まると、心には様々な「境界」が生まれてきます。

最初に生まれる境界は、自と他との境界です。自他の分離が生じ、エゴというものが形成されていく。それと並行して、親から「そういうことをしなさい」と叱責されて、善悪の分別や、真偽、美醜といった概念も生まれてくる。つまり言葉を使うことで、人間は世界を分節化する。それが海や山といった名称である場合には問題はないのですが、そこに価値が伴うときに人間の苦しみが始まる。「善なる自分」と「悪なる自分」があるとか、「この自分は

好きだけれども、この自分は嫌いだ」といった思いが生まれると、その境界の狭間で葛藤が生じるのです。

さらには、サルトルが「地獄とは他者なり」と言ったように、自他の境界の向こう側は何かよそよそしい敵対的なもののように感じてしまう。それがさらに広がって、自分を「我々」というものに同化させると、「彼ら」との間に境界が生まれる。「我が社」とあの「ライバル社」や、「我が国」と「敵国」との間に軋轢あつれが生じるのです。

人間はまた、自然に対しても境界をつくります。二十世紀までの歴史を振り返れば、自然と人間とは別のもので、自然を征服し支配しようという方向に向かつてきました。そうした二項対立的世界観にもとづく科学技術は、ある意味で人間社会を住み心地のよい世界へと変えることに成功しました。しかし、地球環境問題に直面して、自然を征服しようとするのがいかに無謀な試みであったかということに人類がようやく気づきはじめたわけです。その結果、社会は「自然と共生する」という思想に向かっているのですね。

ところがこの「共生」ということは、じつは日本という国が、長い歴史のな

自と他もない、ただ二つの世界。それが自らの生命力により、生成し、変化し、発展し、進化していくのが自然の姿だと観たのです。

かで育んできた思想からみると、まだ不十分なのです。なぜなら、日本文化の神髄とは、人間が生きる世界や自然と自分を一体のものと感じる「主客一体」の思想だからです。この思想から見ると、「共生」の思想には、いまだ「自他の分離」がある。自と他を分けた上で、共に仲良くしていこうと思っているうちは、本当の意味での「和解」は起こらないのです。

——それは主観と客観との間の境界という意味でもあるわけですね。

田坂 じつは「客観」という言葉は、あたかも神の視点で世界を認識したいというエゴの願望が生み出している側面があるのですね。これは科学の基本的立場でもありますが、科学でさえ、量子力学という「ミクロの世界」を扱う分野においては、観察するという行為が、現象に影響を与えてしまうことを喝破している。つまり主観と客観は分けられないということです。

さらにいえば、世界は主観以外にはないという捉え方もできる。臨床心理学者の河合隼雄先生は、「その人にとっての真実」という言葉をよく使われていましたね。ある人が「私の職場は地獄です」と悩みを語ったとしたら、それは「その人にとっての真実」だということです。それを客観的な視点で、「あなたがそう感じているだけでしょ」と言ったら、その人の心の行き場所はなくなってしまうのです。

ところが、「その人にとっての真実」に、もし深い「共感」の心で寄り添ってくれる人がいたならば、その瞬間から癒しが始まるのです。なぜならば、その人の苦しみの根源である「自他の境界」が消えていくからです。

——そこでいう共感とは、意図的なものではないということですね。

田坂 その通りです。自と他が分かれたところでは必ず操作主義という「現代の病」が忍び込んでしまうのです。



「自と他を分け、二項対立的にとらえるところに、自が他をどのように操作するかという操作主義が生まれてきます。この操作主義が地球環境問題を起こしてきたのです」

河合隼雄先生は「カウンセラーがクライアントを癒すのではない。クライアント自身が自らを癒していかれるのです」とおっしゃっていました。そういう意味では、カウンセリングの世界は、宗教の世界とつながっています。

カウンセラーは、まず自分自身を癒すことができなければいけない。自分を癒すことができない人間は、人を癒すことができない。同じように、自分を愛せない人間は、人を愛することが

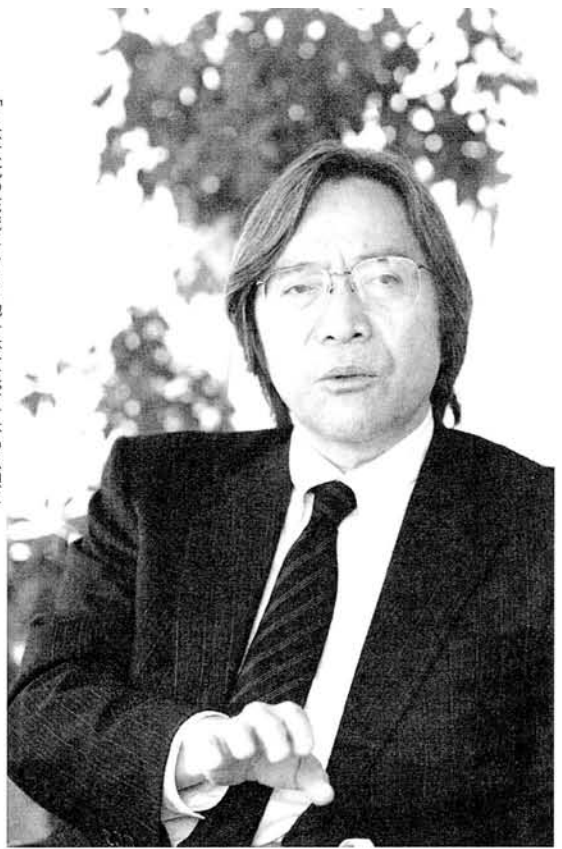
できないのです。そして自分を愛するとは、自分のなかにある境界を超えていくことにほかなりません。

人間は、生まれたときの無垢な心の状態から成長をはじめ、やがて「是非善悪」の世界に入っていきます。しかし、さらに宗教的な修行をしていくと、心のなかの境界が消えていき、「是非善悪なし」の世界に戻っていくのです。これが、いわゆる邪気のない「無邪気」な心です。しかしそれは、弁証法的な螺旋

的發展ですから、単に子ども心に戻ったのではない。両者は似て非なるものです。禅の世界で厳しい修行と深い学識を積んだ良寛和尚が到達した境地は童子のようだった。しかし、それは単なる童心ではない。心のなかに境界がない人は、傍にいてだけで、こちらの心が癒されてくるのですね。

——それは生と死の境界も超えていくということでしょうか。

田坂 生と死の問題は、二項対立的世界の最たるもので、エゴは自分の存在が消えていくことにもっとも恐怖を感じるのです。それゆえ、宗教の根本は死とどう向き合うかなのですね。しかし、人間が目の前の「生」に徹し、今を生き切るとき、「死」というものが消えていく。そして神仏といった大いなるもの導きを感じるようになる。さらにその大いなるものが自分と一つであると気づいた瞬間、エゴはエゴを超えるのですね。それゆえ、本当に深い世界まで到達した人物は、「私」というものが「世界」や「宇宙」にまで広がっていきます。仏教には、「山川草木国土悉皆仏性」というすばらしい言葉があります。草や木という生命だけでなく、無機物と思われる石や岩石、さらには風の



「日本文化の底流にある自他一体、主客一体の思想に
よってこそ、日本は世界に貢献すべきです」

なかにさえ仏性が宿る。この世界のす
べては仏の生命、自分もその大いなる
生命と一つであることを教えています。

日本という国には、もともと自と
他、人間と自然を分ける二項対立的
な発想はなかったのですね。「人為」に
よって為すのではなく、「大いなるもの」
に導かれて物事が然る「自然」という
状態に、日本文化は最高の価値を置い
ていた。自も他もない、そこにただ世
界があり、己も含めて一つの世界。そ
れがなぜか不思議なことに、自らの生
命的な力により、生成し、変化し、発
展し、進化していく。それが自然の姿
だと観たのです。

世界的に大転換が起こっているとき、私たちが見つ めるべきは、深く成熟した精神、思想、文化を育ん できた日本という国の土壌です。

そして、いま人類は、空間も資源も
無限に手に入るといふ幻想が崩れ、空
間や資源の「有限性」といふ問題に直
面していますが、日本という国は、端
から端まで歩いていけるほどの狭い国
土であり、その国土に限られた資源し
か与えられていない国でした。そのた
め「有限の世界」の中で、どのように生
きていくかという成熟した価値観と文
化があるのです。すなわち、日本とい
う国は、いま人類社会に求められてい
る価値観を先取りし、それらの問題に
処する智慧と文化を育んでいた国と
言えるのです。しかし、これは決して、
狭隘なナショナリズムで申し上げてい
るわけではありません。

「人間の精神における成熟とは何か」
と問うならば、「見えないもの」が見え
るようになっていくことです。日本と
いう国は、目に見えないものに価値を
置き、それによって成熟した文化をつ
くってきた国なのです。

たとえば、「働く」といふのは「**働**」を
「**楽**」にすることでであるという労働観が
語り継がれ、世の中を幸せにすること
に「働きがい」を感じるという職業観
が、個人や組織に浸透していた。そし
て、どのような職業も「道」にしていく
深い精神性があつた。剣道、柔道、茶
道、華道だけでなく、経営道や料理道
さえあり、「腕を磨く」ことに深い喜び
を見出す文化があります。

日本には、本当にすばらしい言葉が
数多くありますね。何か良いことがあ
つたときには、日本人は「お陰さまで」
と言う。その背景には「多くのものに
支えられ生かされている。有り難い」
という感謝の心がある。この「有難い」
という言葉も、英語でいう「あなたに
感謝する」といふ意味の「Thank you.
とは違い、It is miracle. 奇跡のよう
なことが起こっている」といふ意味です。
あるいは、茶道でいわれる「一期一会」や
「もてなし」の心得。ご縁あつて出会つ

た方と、一生に一度の出会いと思い定め、一つの時を、心を込め大切に過ごすという深い宗教性の言葉です。

——そうした目に見えない価値が見えるようになるきっかけを世界的につくりだしたのが、「インターネット革命」であるとおっしゃっていますね。

田坂 未曾有の世界経済危機、深刻な地球環境問題に加え、テロやパンデミックなどの問題も起こっている現代は、さながらパンドラの箱を開けたような状態ですが、パンドラの箱から多くの災いが出ていったあとに残ったものは「希望」だったと言います。私はその希望というのは、インターネット革命だという気がするのです。

河合隼雄先生が「クライアント自身が自らを癒していかれるのです」と言

●たさか ひろし 昭和26年(1951)生まれ。東京大学工学部卒業。東京大学大学院修了。工学博士。米国シンクタンク・バテル記念研究所客員研究員を経て、平成2年、日本総合研究所の設立に参画。同社取締役を経て、12年、グローバル・ネットワーク・シンクタンク、ソフィアバンクを設立し、代表に就任。同年、多摩大学大学院教授に就任。13年より、21世紀の新しい生き方と働き方を学ぶコミュニティ、「未来からの風フォーラム」を主宰。18年、シンクタンクとして初の試みである、ネットラジオ局、「ソフィアバンク・ラジオ・ステーション」を開局。公式サイトアドレス<http://www.hiroshitasaka.jp/> 著書は「仕事の思想」「なぜ、働くのか」(ともにPHP文庫)、「未来を予見する「5つの法則」」(光文社)、「目に見えない資本主義」(東洋経済)など50冊を超え、主著は海外でも翻訳出版されている。

われた言葉は、そのまま人類の歴史にも当てはまるのではないか。この厳しい状況を病と見るならば、単なる対症療法ではなく人類の意識が根本的に変わっていかねばならない。しかし、無理に「意識を変えよ」と力説しなくとも、まさにこの時代に起こったインターネット革命が人類の意識を変えていく。過去にグーテンベルクの発明した活版印刷がそうであったように、ふたたび、メディアは、人類意識の進化を加速させる役割を果たすのでしょうか。

たとえば、地球の環境破壊をどれほど言葉で嘆いてみても、その実感は伝わりません。しかし、たった一枚、自然破壊の写真を見せられただけで、我々の感覚に訴えかける力がある。そうし

た言葉を使わない、感覚と感性に直接働きかける高度なイメージ・コミュニケーションが広がっていけば、「地球意識」と呼ばれるものも自然に育まれていく。いま「感性共有革命」と呼ぶべきものが始まっているのです。

そして、世界的にそうした大転換が起こっているとき、私たちが見つめるべきは、深く成熟した精神、思想、文化を育んできた日本という国の土壌です。足下に日本の精神、東洋思想、仏教文化といった豊かな土壌を持ちながら、一方で、科学技術や資本主義、社会システムにおいて最先端にある日本という国は、いま、自らの歴史的役割を自覚すべきでしょう。二十一世紀、日本は、「成熟した文化の力」によってこそ、世界に貢献すべきなのです。❖